

森や自然に「夢中になる」 誘いとしての博物館の役割

滋賀県立琵琶湖博物館 専門学芸員 金尾 滋史

はじめに——森や自然への「誘い」としての博物館

現代社会では、人々が自然と触れ合う機会は減っている。都市化や過疎化、生活様式の変化、野外活動に伴うリスクへの意識などが重なり、日常生活で森や川に入る機会は少なくなった。その結果、自然との触れあいは観光やアウトドア、イベントのような非日常的な体験になり、さらにゲームやインターネットなどのデジタルメディアを通じた仮想体験も増えている。多くの人にとって、自然の中に出かけることは日常ではなくなった。

一方、自然に関する情報は増加している。研究成果や生物の話題は SNS で瞬時に拡散され、写真や動画も豊富だ。しかし得られるのは知識や情報であり、匂いや温度、湿度など五感で感じる体験とは異なる。実体験が少ないと、自然を自分ごととして捉えにくくなる。だからこそ、人々の好奇心を引き出し、自然への第一歩を促す場が必要である。そして、それを担うひとつの機関が博物館である。本稿では自然史系博物館を中心に、森や自然に「夢中になる」誘いとしての役割を整理する。

博物館とはどのような施設か？

博物館というと、多くの人が「何かを展示している場所」というイメージを持つだろう。これは、一般利用者が利用できるエリアの中心が展示室であ

る場合が多いためである。しかし実際の博物館、研究成果や資料、展示、イベント等を通じて、利用者が自然と出会う機会を創出する場でもある。

博物館法第二条では「この法律において『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関のうち、次章の規定による登録を受けたものをいう。（一部略）」とある（<https://laws.e-gov.go.jp/law/326AC1000000285>）。この規定による登録を受けたものとは、登録博物館や指定施設のことを指すが、実際には、登録を受けていない、「その他の施設（いわゆる博物館類似施設）」も多数存在し、それらを含めると国内には非常に多くの施設が存在する。

令和6（2024）年度文部科学省社会教育調査中間報告における国内の博物館と呼ばれる施設としては、国立や公立、私立も含めて登録博物館969館、指定施設375館、博物館類似施設4422館の合計5766館が挙げられている（<https://museum.bunka.go.jp/museum/>）。

ひとえに博物館といっても、総合、自然史系、科学系、歴史系、民俗系、美術系など多様な分野がある。また、生きた生物を扱う動物園や水族館、植物園、昆虫館などもそのひとつに数えられる。さらに、名称が歴史民俗資料館であっても、地域の自然や生物について深く知ることができる場合もあり、カテゴリーの境界線は必ずしも明確ではない。私たちの周りには実にたくさんの博物館があるので、自分たちの地域や訪問先にどのような博物館があるのか、調べてみると、より一層興味が深まるのではないだろうか。博物館に関する情報は都道府県やジャンルごとの博物館ガイドが書籍として多数発行されているほか、全国規模もしくは都道府県単位で検索できる博物館ガイドのようなサイトも、文化庁や各都道府県の博物館連絡協議会などのウェブサイトで公開されている。また、近年ではSNSなどでも多くの情報を得ることができるので、自分の興味にあった博物館が見つかるかもしれない。

そして、その博物館を支えるのが学芸員をはじめとするスタッフである。学芸員は博物館の専門職として研究、資料の収集や保存、展示、交流活動・教育普及活動など多岐にわたる役割を担っている。さらに、博物館では学芸

員以外にも様々な職種のスタッフが働いており、それぞれに重要な役割を果たしている。館内ではスタッフと出会う機会があまり多くないかもしれないが、ぜひ「中の人」の存在にも注目してほしい。

自然に誘う場としての展示の機能

実際に自然史系の博物館に足を踏み入れると、まず多様な標本、模型、映像、ジオラマなどの展示物が出迎えてくれる（写真1）。

博物館によってテーマや目的は多彩で、それぞれの博物館の個性が見えてくるだろう。標本などの展示は一見静的な資料だが、実際には自然の世界へ人を導く装置としての役割を持つ。展示には現地の自然を再現するジオラマ的なものもあれば、来館者がひとつひとつの標本を観察し、想像力を働かせることで自然への関心を深めるタイプのものもある。例えば、ケース内に並ぶ昆虫や鳥の標本を前に、来館者はその色や形の違いに驚き、自然界での姿を思い描くだろう。また、動物園や水族館、昆虫館などでは、ダイナミック



写真1：琵琶湖博物館C展示室「生き物コレクション」の様子。滋賀県に生息する多様な生物を膨大な標本で展示し、琵琶湖とその周辺の生物多様性を紹介している



写真 2：琵琶湖博物館水族展示室「暮らしの中の魚たち」。それぞれの魚類のもつ形態の特徴や行動をじっくり観察することができる

な生き物の観察を通じて、その生物や特徴的な行動、においや音など五感を通じた大きなインパクトを与えられる（写真 2）。

展示の構成や工夫は、学芸員の腕の見せ所でもある。研究成果や知見に基づき、標本や解説パネル、展示デザインなどで来館者の興味を引き出すために様々な工夫を凝らす。その目的は単なる受動的な知識の受け取りではなく、自然の現場に出かけて観察したくなる能動的な動機を育み、自然の不思議さや面白さを体感できる場をつくることにある。また、展示物の一部に触れることができる標本や模型にすることで、視覚だけでなく触覚を通じて理解を深める工夫もある。こうした仕掛けにより、来館者の好奇心を持続させる仕組みが形成され、展示室の体験をフィールドへと繋げる役割を果たしている。

館によっては、学芸員や専門スタッフから展示の詳しい解説を聞ける機会もあるのでぜひ参加してみしてほしい。解説を聞くことで展示の解像度が上がり、理解が深まる。こうした学びは、自然との出会いをより豊かにし、体験の質を高めてくれる。フィールドに出かける前に、その地域にある博物館を訪れることで、対象となるフィールドや生物の特徴、観察ポイントや注意す

べき点等を事前に把握することができる。

フィールドへと誘う博物館の交流事業

博物館は展示による情報提供だけではなく、来館者をフィールドへ誘う活動も積極的に行っている。著者の所属する滋賀県立琵琶湖博物館では、「フィールドへの誘いとなる博物館」を理念の一つとして掲げており、館内の展示や取り組みには、湖と人間という大きなテーマに興味を抱いてもらうための仕組みが組み込まれている。そして利用者が主体となる交流事業を重要視している。

展示をハード面としての学びや楽しみの場であるとするれば、博物館が実施する講座や観察会、イベントなどの行事は、ソフト面としての出会いと学びの場といえる。各地の博物館では、学芸員やスタッフ、さらには外部の専門家を講師として招き、座学やフィールドで多様な行事が行われている。ここでは生物の観察方法やポイントだけでなく、フィールドマナーや危険箇所な



写真3：フィールドでの自然観察会の様子。その場に生息する生物を自分たちで採集するとともに、観察のポイントやその地域の生態系の意義、安全な観察方法について紹介している

ど注意すべき点についての実践的な知識を得ることができる（写真3）。

講師やスタッフに時間の余裕があれば、終了後により詳しい話を聞くこともでき、展示の内容以上に自分自身の知識を深める機会となるだろう。このように、一方的に情報を伝えるだけでなく、一緒に考えて知識を深めていくための双方向的な交流が多くの中で行なわれている。

また、こうした観察会を毎年同じ場所で継続して行うことは、単に観察の機会を提供するだけではなく、地域における重要な生物の発見やモニタリングとしての機能も果たすことができる。楽しみながら保全のためのデータが蓄積されていく点も重要である（金尾，2008；2013）。

多くの施設では、年間を通じて行われる行事をチラシやホームページで公開している。興味のある内容を調べ、ぜひ参加してみしてほしい。ただし、事前申し込みや予約が必要な場合もあるため、参加方法については個々に確認をする必要がある。

博物館を上手に活用してみよう

前述の通り、博物館には自然に関心を持つ人にとって、単なる展示施設ではなく、自分自身を高め、フィールド体験を充実させる拠点となる。ここでは、著者の経験も踏まえ、自然や森に興味を持つ利用者が展示や観察会以外で博物館を有効に活用する方法をいくつか紹介したい。

①博物館へ質問・相談をしてみる

展示を見て疑問に思ったこと、自分で調べても分からなかったこと、フィールドで観察して名前が分からなかった生き物などについては、その地域の博物館へ質問することができる。著者の所属する琵琶湖博物館には「質問コーナー」があり、毎日交代で学芸員が常駐しているため、様々な質問に応じることができる（松岡，2025）。質問コーナーでは利用者が何を知りたいのかを把握し、単純に答えを出すだけではなく、どうすれば答えが見つかるのかを一緒に考えてサポートするようにしている。ただし、このような質問コーナーが常設されている博物館は多くないため、どこに質問してよいか分からない場合は、まず受付で尋ねてみるとよい。中・小規模の博物館の場合、受付にいるスタッフが学芸員であることも少なくなく、その場で対応してくれ

ることもある。博物館によっては電話やメールで質問を受け付けている場合もある。

ただし、何でも闇雲に質問すればよいわけではない。対応してくれるスタッフの時間にも限りがあるし、何より質問をする側にも一定のマナーは必要である。時間がかかりそうな内容の場合は、事前に電話やメール等で対応してもらえる日時を確認してもらえると博物館スタッフとしてもありがたい。また、スムーズなやり取りのためには、まずは自分でわかる範囲のことは調べた上で、疑問を整理しておくことが大切である。フィールドで見つけた生物の名前が知りたい場合には、いつ・どこで見つけたかという情報とともに、ポイントを押さえた写真を撮影しておくことより詳細な回答が得られやすい(金尾, 2015)。スマートフォンやデジタルカメラの普及により写真撮影が容易になったため、ぜひ活用してほしい。

こうした博物館への質問がきっかけで、その地域で未確認だった生物の発見や長らく記録が途絶えていた生物の発見につながった事例もあり、地域の自然史情報への貢献につながることもある(金尾, 2021)。

②出版物を楽しむ

博物館では展示解説、特別展・企画展の図録だけでなく、博物館だよりのような情報誌、フィールド観察ガイド、研究報告、年報など様々な出版物を刊行している。これらには地域の自然の価値や生物の記録が詳細にまとめられていることもあり、より学術的な知見に触れることができる。また、学芸員による新聞連載記事をまとめた書籍や、都道府県の博物館協議会や学芸員のネットワークで執筆された書籍もあり、それぞれの専門家の視点に触れることで、新たな気づきを得る機会となる(神奈川県博物館協会, 2005; 滋賀県立琵琶湖博物館, 2011; 北海道博物館協会学芸職員部会, 2016 など)。

これらの出版物の多くは、博物館でのみ入手可能な場合もあるが、一般書籍として販売されているものは、書店やインターネットでも購入できる。また、研究報告などは、博物館のホームページから閲覧が可能な場合もある。積極的に活用すると、展示だけでは得られない知見に触れることができる。

③友の会やボランティアなどへの参加

博物館の活動に興味を持った利用者が、より深く関わる方法として、友の会やボランティア等への参加がある。友の会は館ごとに名称や組織形態が異

なるが、展示だけでは得られないコアな学びを共有し、同じ志をもつ会員や学芸員・専門家と密接につながることができる場でもある。琵琶湖博物館の場合は友の会とは少し役割が異なる「はしかけ制度」がある (<https://www.biwahaku.jp/about/hashifr/hashikake/>)。これは、琵琶湖博物館の理念に共感し、共に博物館を作り上げていくという方針のもと、自分たちのやってみたい活動を実現する仕組みであり、博物館はやりたいことの「この指とまれ」の声かけ役である。現在も、魚つかみや植物観察、写真撮影などの多くのグループが活動しており、博物館を起点としたコミュニティ形成に寄与している。

ボランティア活動も、博物館における重要な参加形態である。現在行われている多くの活動は、展示ガイド、標本整理、イベント運営補助など来館者だけでは関わることのできない博物館の裏側に関わることで、学びややりがいを得ることができる。各館の友の会・ボランティア制度、それに類似する活動の有無については、それぞれの博物館のホームページ等で調べてみると良いだろう。

近年では、友の会やボランティアに加えて、地域のNPOやグループ、企業などが一同に集まるイベントも博物館で開催されている。大阪市立自然史博物館の「大阪自然史フェスティバル」、兵庫県立人と自然の博物館の「共生のひろば」、琵琶湖博物館の「びわ博フェス」など、地域住民と学芸員、専門家が交流するイベントも増えている（黒田，2010；和田，2023）。こうした場に参加することで、新たな学びや出会いのきっかけが生まれるだろう。

④市民参加型調査への参画

博物館は観察記録や写真などの「たくさんの眼による記録」を集め、保存する場としても重要である。博物館活動に興味を持った人が、観察した情報を博物館に提供することで、単なる参加者から地域の情報を記録する「記録者」へと役割が広がる。

市民参加型調査は、全国の博物館で古くから実施されており、テーマに沿って集められた情報は、分布図やデータベースとして整理される。特に平塚市博物館や大阪市立自然史博物館の取り組みは、その先駆的事例として知られている（浜口，2008；Ishida，2024）。琵琶湖博物館でも「フィールドレポー

ター制度」により、市民が自分の身近な観察記録を報告する仕組みが整えられている。近年では、SNS やオンライン投稿フォームを活用したプロジェクトも増えており、デジタル技術の普及が市民参画の裾野を広げつつある(石田, 2020 ; Ishida, 2020 ; 石田・若ごぼう市民調査グループ, 2023)。

こうして集まった情報は、地域の生物多様性の把握、外来種の早期発見、保全活動の基礎資料として活用される。つまり、地域住民の観察活動は、地域の自然を守る実践へとつながるのである。このプロセスを通して博物館は「知の循環」を生み出す場となる。

⑤資料データベース・デジタルコンテンツ等の活用

2023年4月の博物館法改正により、博物館が行う事業の一つとして、「デジタルアーカイブの作成と公開」が加わった。これに伴い、標本データベース、デジタル図鑑、オンライン展示などの整備が急速に進んでいる。利用者は、自宅にいながら地域の自然史資料にアクセスできるようになった。各館が収蔵している標本情報はホームページ上にデータベースを公開している館もあり、さらに国内の自然史系博物館の標本情報を横断的に検索できる「サイエンスミュージアムネット」(<https://science-net.kahaku.go.jp/>)も整備されている。これにより、研究者だけでなく、一般の利用者にとっても自然史への理解を深める手がかりとなる。

自然へのまなざしを育む場として

森や自然に夢中になることは、単なる趣味やレクリエーションではない。自然に目を向け、観察し、考え、記録する営みは、個人の生活や社会に深い影響を与える。博物館は、その営みを支える拠点として、来館者に自然への関心と体験を提供する役割を担う。そして自然に夢中になるとは、知識を得ることとは異なる。見る・触れる・調べる・考える・誰かと話す、こうした一連の体験がつながることで、世界の見え方が変わる瞬間が訪れる。この「世界の見え方が変わる経験」こそ、博物館が提供できる最も深い価値である。子どものころの昆虫採集や植物観察の経験が、大人になって再び興味を呼び覚ますことも少なくない。自然への関心は、人生の節目で何度でも育むことができる。博物館は、そのきっかけをつくる場として、誰にでも開かれている

る。

こうした体験を通じて、博物館は自然と人との関係を育み、地域社会における自然観察や保全などの文化の形成に寄与する。個人の学びや観察が地域全体の知識や保全活動に循環することで、博物館は現地体験と情報蓄積・共有をつなぐハブとして、市民と地域の自然を結びつける存在となる。今後も博物館は、自然への扉として、また博物館スタッフと来館者を結びつける場として、人々を森や自然へ誘う活動を継続していくことが求められている。

[引用文献]

- 浜口哲一 (2008) 生きもの地図をつくろう. 190pp. 岩波書店.
- 北海道博物館協会学芸職員部会 (2016) 北の学芸員とっておきの《お宝ばなし》. 348pp. 寿郎社.
- 石田惣 (2020) 市民科学による大阪府のオオクビキレガイの生息調査, 並びに分布の現況. *Venus*, 78(3-4) : 105-118.
- Ishida S. (2019) Distribution records of apple snails (*Pomacea* spp.) in Japan collected during 2017-2019 through a citizen science project for introduced species conducted by the Osaka Museum of Natural History. *Ecological Research*, 35(6) : 1114-1118.
- 石田惣・若ごぼう市民調査グループ (2023) 地域の伝統野菜「葉ごぼう」の生産地と消費地の地理的構造—市民科学によるアプローチ—. 大阪市立自然史博物館研究報告, 77 : 11-27.
- Ishida S. (2024) Citizen Science and Natural History Museums in Japan. Suzuki-Ohno Y. (ed.) *Community Science in Ecology -Case Studies of Public Participation in Ecological Research in Japan*. pp.131-148. Springer Nature.
- 神奈川県博物館協会編 (2005) 学芸員の仕事, 271pp. 岩田書院.
- 金尾滋史 (2008) 博物館と生態学(7) 博物館における長期モニタリング活動—たくさんの眼による地域モニタリング—. *日本生態学会誌* 58(2) : 143-146.
- 金尾滋史 (2013) 滋賀県東部のため池におけるオグラヌマガイの発見とその経緯. *ちりぼたん*, 42(1-4) : 57-62.
- 金尾滋史 (2015) 生きもの調査のもつ楽しみと可能性. *JARUS*, 115 : 49-53.
- 金尾滋史 (2021) 滋賀県内におけるコガタノゲンゴロウの再発見と博物館の貢献. *地域自然史と保全*, 43(1) : 63-66.
- 松岡由子 (2025) 「質問コーナー」ってなに?? 質問コーナーに来てみませんか. *びわはく*, 9 : 11.
- 滋賀県立琵琶湖博物館編 (2011) 生命の湖 琵琶湖をさぐる. 224pp. 文一総合出版.
- 和田岳 (2023) 大阪自然史フェスティバルの場を活用した展開. *地域自然史と保全*, 45(2) : 83-84.
- 黒田有寿茂 (2010) 共生のひろば—市民との連携による環境学習・生涯学習の推進—. *全科協ニュース*, 40(4) : 3-5.